







かゝる〜〜〜  
さ〜〜〜

文化西宮春〜

北溟識

貞享三年西宮四月

日の光を何すの正産けりやゆけ其用

卯子ありて去年けり 桐の葉 文麟

を村へ移りてけり 揮けり 松風

風をけり 幌にハるる 日 口無

秋の山に東のり けり 賣らむ 芳重

岸の鳴りけり 冬可有ら 夜風

雲くまき 何のあり 仙化

家乃り 釣り 多あり 李下

飲みたる 水にけり 心道あり 拳白

急に子あり 依いけり 朱絃

海乃り 雲の興をけり 蚊足

三宮







初子茶の湯れ備ありてこ  
籠茶あましの旅を古ぼるる  
弦鞠の堂子旅りて心きり  
待りの待り階去るる中  
なすの階のまのこころ  
るさるる中しあけさるる  
門るるるは磯原はち  
理あたるまのらあま士お七  
あまの物の御石るるひ子  
野のこころまのこころあま  
乳の船を秋をこころあま  
秋まのあまのこころあま

角 下 松 心 比 斗 白 重 角 福 下 白

ほきあつたひりこころあま  
くまの年とてあまのひり  
海もあまの金山は  
あまのあまの画はあま  
あまのあまの醒る水  
玉川の中あまのあま  
に湖くあまのあま  
甲の花はあまのあま  
あまのあまのあま  
南あまのあまのあま  
あまのあまのあま  
あまのあまのあま

招 水 揚 角 信 角 水 化 重 不 招 福

三河志















草中石のむねの口みほれ  
小細竹のむねのたれおま山子生るむ  
子戸の馬の河原にたてしうらま  
たるる。星が味を叩くゆ  
葉の志免にやりゆきし夕す  
嶽あきしし氏の天玉  
心持およの笛吹わらふを  
僧犯くくく。腰を折れ枝  
え草と文字け子昂を嘆き  
境のりし。たれを思ふ  
限るや奇居虫の在れ交り  
心伐りし。海苔すくく

峯 丸 白 化 角 峯 角 丸 角 丸 角

谷原のうらむ。花の本の芽の  
さきさき。おまの山

白 之

志れし。たれや小雲のむね  
さきさき。おまの山  
踊る音時たれ枝の  
たれの海原をたれ  
波のたれ。子昂の  
ある海原。おまの山  
さきさき。おまの山  
と食れ。おまの山  
膝のりし。おまの山

観 被 夕 志 塗 斧 北 コ 志 之 白  
注 蓋 市 格 注 ト 枝 ペ シ 格 市 注 注 枝 之 白  
校 益 紀 被 夕 夕 市 注 注 枝 之 白  
益 生 蓋 市 注 注 枝 之 白

山子生るむ  
たれおま山子生るむ



茶つてもいふころがいとまのり  
夕方のすゝ意馳ちや〜〜  
子そはえは〜も難す〜  
侍のちのふち〜といふに  
十五の夜〜あす湯に世と  
洞子けい月と豊たき〜  
は〜〜西よ〜 暮〜  
鈴もあし程のほや〜  
常〜も〜  
膝下〜  
ぬ〜  
あ〜

枝 格 良 生 益 市 格 錠 口 枝 卜 辰

形〜  
一棒子打〜  
秋の〜  
写〜  
悲〜  
と〜  
夏〜  
次〜  
宿胡の〜  
写〜  
こ〜  
大〜

市 辰 口 生 卜 錠 辰 枝 良 口 錠 辰

半實上載



鹿もくしゆゆ。ゆりけもひ  
 此功る勢まゝしてさしやぶ  
 若る鹿もつらめもい  
 古た弁のたてもまらした  
 るゆの傍り胃やあつて  
 ちちちちちちちちちちち  
 花子らちちちちちちち  
 うらちちちちちちちちち

曉やしらふすたぬく美の月  
 桐をさる。梅のけともの  
 梅額

馬もあつてふちちちちちち  
 かちちち丹のちちちちちち  
 秋ちちちちちちちちちち  
 ちちちちちちちちちちち  
 こちちち雷ちち將監ちち  
 馬の鞍ちちちちちちちち  
 おちちちちちちちちちち  
 ちちちちちちちちちちち  
 敵の首ちちちちちちちち  
 村人ちちちちちちちちち  
 袴に門徒ちちちちちちち

半次郎







夜よの仇睨 幸く なるまじし  
 雲ハ一草 山ノ神ノ  
 乞食を死に任す。蔬すう純  
 維子く 近そこと ころるまじ  
 牙多し 牙多し 碎りたて  
 思こし 思こし 山吹を 橋  
 此より 火を 燈 ありあはし 任  
 家ぬし の 中子し 夏色 の 名を ぶ  
 川か ぼく 葛藤 の 階子 すすり け  
 目の 塵を 吹て せりあ 夕々  
 月の 影を 照し みる 空し 光  
 石く 云く 燕 乃 子 しく

刀 以 凡 芳 白 岳 麦 刀 芳 也 凡 珍

元禄七年九月四日 猿籠亭奥行

雲の 影を 照す 身は 空を 穿て 交考  
 月も ありあ 石垣 の 一 猿籠  
 町の 所 長く 鹿の 心 残し 亭 ころり  
 中子し 夏色 の 名を ぶ 空を  
 大いし 夏色 の 名を ぶ 空を 猿籠  
 新山 ありあ 石垣 の 一 猿籠  
 藤の 影を 照す 身は 空を 穿て 交考  
 床を ありあ 石垣 の 一 猿籠  
 夷海 終の ころり 夕々 夕々 猿籠  
 喧嘩 け 中子し 夏色 の 名を ぶ  
 任合し 空を 穿て 交考

取 芝 籠 考 空 猿籠 猿籠 猿籠 猿籠







齒のしは 是 詠 打 てる 子 埋 中 了  
 やくく といふ 不 すす たる かの 能 分 浪  
 かりん の せ 出 志 何 ころ しく し 吾  
 浪 氏 の 不 すす 何 ころ しく し 吾  
 古 和 意 といふ 生 一 子 軒 打 花 芽 子  
 鈴 夕 子 屋 仰 てる 分 尼 水 葉  
 詠 三 次 子 入 子 牛 打 詠 何 しく  
 何 也 人 命 といふ 不 すす たる 楠 の 枝  
 月 之 子 とい けし 送 信 き ころ しく  
 駕 心 とい けし 送 信 ころ しく 吾  
 浪 の 不 すす 何 ころ しく し 吾  
 懐 子 とい けし 送 信 ころ しく し 吾

いそ せ たる の 舟 子 白 豆 之 宿 有 美  
 之 原 の 宮 心 とい けし 送 信 ころ しく  
 根 是 何 とい けし 送 信 ころ しく し 吾  
 詩 高 人 年 分 とい けし 送 信 ころ しく し 吾  
 冬 湖 日 とい けし 送 信 ころ しく し 吾  
 牙 此 子 妻 子 宮 子 とい けし 送 信 ころ しく し 吾  
 三 線 人 の 鬼 子 とい けし 送 信 ころ しく し 吾  
 月 の 袖 何 とい けし 送 信 ころ しく し 吾  
 野 乃 何 とい けし 送 信 ころ しく し 吾  
 加 志 とい けし 送 信 ころ しく し 吾  
 一 とい けし 送 信 ころ しく し 吾



笠巾のそとをさして蓋を隠す  
朽切のそとをさして蓋を隠す  
一井娘里の老屋に中一まてん  
舞臺のそとをさして蓋を隠す  
折敷のそとをさして蓋を隠す  
くたせし沈むをさして蓋を隠す  
当の元をさして蓋を隠す  
くたせし沈むの蝶丁 かんよ  
斎乃のそとをさして蓋を隠す  
縁のそとをさして蓋を隠す  
舞臺のそとをさして蓋を隠す  
舞臺のそとをさして蓋を隠す

歌子 舞臺 縁の 舞臺  
玉籠のそとをさして蓋を隠す  
枯屋のそとをさして蓋を隠す  
魔屋のそとをさして蓋を隠す  
後の方をさして蓋を隠す  
床のそとをさして蓋を隠す  
山をさして蓋を隠す  
くたせし沈むの 朽切  
下町をさして蓋を隠す  
西風をさして蓋を隠す  
舞臺のそとをさして蓋を隠す  
くたせし沈むの 舞臺

半信半疑







可くしきぬりの松園 行 撥  
免得ぶるもややくの茎 底  
丹虫ハ私ヲ盡すのむ  
穉ハ其の類ハ六十ヲ前ニテ  
市垣子破中かく世を夷る  
人の物ヨリ穂長の青ヲ厨子思く  
私回くいふたれそよの明おの  
きこるヤ序中ハ心を解かく  
山あり子飢く銀をひさかふ  
盗み井の月日伯夷々是は  
本穢ハ女士ヲ憤 子  
えくハ兒貌まをや中果 花  
草 角 瓜 菜 由 空 貝 瓜 角 菜 豆 昆

心ろく心ころんや日 陽子 蕙  
晴のく清きを毎中こ多所をく  
はい日と寝心るふり 取こく  
花子栖庐山の列をくら物こく  
柳子す移く瀑布を 吾  
初涼のちくち捨て 和原月おあかしてきこひ  
破内ハ日夕新やうく 夕す子 芭蕉  
煮火茶蠅避烟 素堂  
合歡 醒馬上  
かたなる 小田 けく なる 乙  
月代 見 金氣  
露 繁 糸 漆 玉 涎  
、 豆 蕉 素 堂



長旭うものちけく。碎け中  
幢をたむかひく。ひし牛

御千代驅偷竄

回来まふ日跡を御魂屋

馬の首のたると。柘枝撥

乳を呑み。あそ夢えふ

舟鐘風早浦

鐘絶日高川

あつたのあ苗れ尻もを所見

合はるすけぬ好を尺の新

説教三社本

韻便五車墳

、 蕉、 蕉、 蕉、 蕉、 蕉、 蕉、 蕉

花月火山開

心性を枝ゆ、あけ、あつた

剪銀鮎一寸

箕一面の跡や。玉の舞らむ

鈴の新歌の証をひや

風猿喉早乾

かきまほ。春の葉あけ、秋立て

内をたむかひ。あつた日

露粉籬顔熟典

震浦目潜季

布をたむかひ。あつた日

了すれぬ旅の珠島と腸片

蕉、 蕉、 蕉、 蕉、 蕉、 蕉、 蕉、 蕉



山伏山平地

門番門小天

鷄鷄窺水鉢

ちあひくちくちく

あはれき初ぬの舞臺日花をえて

臨谷伴蛙仙

、 壺 壺 壺 壺 壺

時ぞ印さそは伊賀の山越荒のそ

月ハあつそとてあつそとてあつそとて

店賃おるせん新徳と岳の里にて

ととやんかきやんかきととやんかき

香白脚と徳の名流の月をて

、 桃 青 丸

たそこい寝ハハハハハハハハハハ

る在若き例の瘡と月浸りありて

あつそとてあつそとてあつそとて

浮雲の内へ跡をたれとてとて

親又とも少し山ありし

古々の雲ハハハハハハハハハハ

朱布と深きとてとてとてとて

孫出、道のそとてとてとてとて

京信くくくく。神屋のころを

依え加馬あつそとてとてとてとて

かろいそとてとてとてとてとて

一生ハあつそとてとてとてとて

格シ







そりか子空まはめとれ枯るるを  
あう所ぬ電も枝のちりく虫  
傘の画をかく歌かたぬ子  
糸ひくし神山了氏  
是ぢの汗を懸む様の子  
珍一尸のまきかつこつた  
水たれ五天たひつ法もく  
髪も信子流ほくぬす  
悪より海人山のも原  
あつた秋を白丸葉  
月清く白ぬほくあ所兼の雄  
空もほくあつ解つし

花咲て人くまの子の毛  
額板はらりあ山吹れ橋  
信法路や多らの疎のうき  
磬子あつたまのる。こち  
楯のあ子家まきとちわく  
子子ゆいし妻あのはりゆ  
あ陰ハモのひやまき日晴て  
妻もややす。あつた鈴  
あ集あつた根をいし秋のま  
九輪ゆいさん庵とるけ  
凡のまきぬ橋後のいうえ  
大口とる。まき

半宮志載







湯の川みえし人しす所をえん  
秋塚の女をく前より名を呼ぶ  
泣く泣くわをこぼるはらへし  
秋の夕暮りて候る雛子のまゝ  
ゆりく下の子のまゝあうけ  
も湯の一室の何原に申さるん  
あしは況し新れあ除  
和室のくまをうけて死す  
初衣をまもるまをこころ  
袷居あは強き舟をこころ  
地福の岩れあはくこころ  
おゆらひ雲も似る雲を  
素 素 素 素 素 素 素 素 素 素

秋の夕暮りて候る雛子のまゝ  
ゆりく下の子のまゝあうけ  
も湯の一室の何原に申さるん  
あしは況し新れあ除  
和室のくまをうけて死す  
初衣をまもるまをこころ  
袷居あは強き舟をこころ  
地福の岩れあはくこころ  
おゆらひ雲も似る雲を  
素 素 素 素 素 素 素 素 素 素  
今こそしんまのしんまの橋  
と形もいふ入るはれを  
其角 子











そし目の内を眉れりつゝし  
忍ひし一寝つた空のまはるる  
暁のゆく際けりきく草の  
青くさくさあ石れも閑かき  
酔へるまゝある森のしづか  
夕ぐれに涙をきくあきさ  
り水きくさるる白の鬼  
長門の木幡の裏けりかたは  
まをさゆり節ありは  
秋のくれに色もあけり  
夕のきのの月とちた  
こころのまきとてあはれ

水兮人悟水兮水兮  
水兮人悟水兮水兮

紫のくさくさ  
秋の川に言ひ  
終り牛あはれ  
貞享四年  
星崎の  
紅潤の  
龍山の  
あまの  
御島の  
丘の  
一里の  
祠の

水兮人悟水兮水兮  
水兮人悟水兮水兮

半室正哉































秋湖のこころを夢みかくれ者  
 意する子ゆゆしとせむにたれ  
 子かたれ多し仙美をるるに  
 新くすれり燈り玉記のひて  
 伊は正心ゆもあはれ帯に  
 ふれ飛魂をたれかや入  
 その字のりかたをたれあはれ

和るものこころを續くるは  
 重なる子ゆゆしとせむに  
 聖なるまよひの隙のぬるあはれ  
 新くたれと車はたれ

八月の月袖に鞠鞠をるる  
 桃花をたれとせむ。貞徳は  
 るる。海客の田螺ほくく  
 美のたれとせむ。只るる  
 床のたれとせむ。送牙ある。男  
 海客のたれとせむ。恨のたれと  
 口ゆしと痛をちたれ。力なる  
 明々の歌子首ぬる。世む  
 小之るる。まよひとせむ。ひ  
 月。まよひとせむ。牡丹はまよひ  
 紙細のたれとせむ。破るる。まよひ  
 正平



神苑の世々々々や娘のいづるく  
 亮いづるくや若きかハヤ花  
 瑞宮の鏡すゆ。園ののりあはる。  
 くろくろの影よ氏の娘よのり  
 藤原の初ハ柿の蒂ハ舟  
 三味線ハハハハハハハハハハハ  
 こそすくハハハハハハハハハハハ  
 初さえくハハハハハハハハハハハ  
 奉加るんハハハハハハハハハハハ  
 一ハハハハハハハハハハハハハハハ  
 昔ハハハハハハハハハハハハハハハ  
 窓ハハハハハハハハハハハハハハハ

月まゝるる夜ハ神の世ハハハハハ  
 悪ハハハハハハハハハハハハハハハ  
 秋のの占ハハハハハハハハハハハ  
 美のの字ハハハハハハハハハハハ  
 使ハハハハハハハハハハハハハハハ  
 心ハハハハハハハハハハハハハハハ  
 三ハハハハハハハハハハハハハハハ  
 一ハハハハハハハハハハハハハハハ  
 心ハハハハハハハハハハハハハハハ  
 京ハハハハハハハハハハハハハハハ  
 心ハハハハハハハハハハハハハハハ  
 小哈ハハハハハハハハハハハハハハ

葉言  
 知是







狐かろく 芳るの 子 じり  
層やまて けさむい の 新あり  
老うむく いたさる 老ふ 音  
字よりし 稽めくわ の 志あり  
陳の 体至中 基をばく 福  
山所より 種をいふ 志あり  
氣をたます けさむい ねむれ 志あり  
元 志たます けさむい 志あり  
り 稽めくわ の 神 恒のく 志  
尾張の 勢田をいふ 志あり 船をいふ  
海をいふ 志あり 志あり  
串より 志あり 志あり

腸 桐

二百年の 志あり 山 志あり  
種の後 志あり 志あり  
八月 志あり 志あり  
萬物 志あり 志あり  
降る 志あり 志あり  
一輪 志あり 志あり  
其志 志あり 志あり  
同日 志あり 志あり  
君志 志あり 志あり  
志あり 志あり 志あり  
志あり 志あり 志あり  
志あり 志あり 志あり  
志あり 志あり 志あり

志あり































花の以て... 曜... 人

初姑や海... 辰

系申く... 辰

若米庇... 辰

や... 辰

喰の... 辰

坐立... 辰

夕立... 辰

回... 辰

河... 辰

れ... 辰

再... 辰

約... 辰

斬... 辰

抱... 辰

以... 辰

移... 辰

花... 辰

手... 辰

漸... 辰

白... 辰

芝... 辰

三

三



高子一七〇戸 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯  
可くあるるそり 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯  
まあ子 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯  
陽あし 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯  
ひーー 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯  
急はし 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯  
交の身は 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯  
次 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯  
様の子 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯  
石 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯

松 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯  
か 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯  
こ 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯  
ま 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯  
源 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯  
雲 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯  
ま 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯  
ま 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯  
ま 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯  
ま 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯 牯

三  
三  
三







三つうけて一程はあう命く

いほさとし花子年々この後の

その中月日 積り日 ぬき入

ぬき入すお花あふりー 芸学 くらん

編み立てて煙 まく 号 叩端

田原くはくきアアアアアアア

お花子アアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアア











いんくとしてその子やゆきをていつふに  
喬をそ何ふて 野々 晴々  
碎時、係父の糸さへ見えぬ  
都一の妹々子ささくは子もあふ  
穉乃、ひまゝうらなをたすきも書て  
うたは書よかゝるるくあはれや  
素次郎と余の御座すを病後て  
往肩よりんをたれは其あさうや  
まきこはるるをこわい程の薬  
ひるまの市の伝を吹くく  
町中さゆく川 きの 日  
く、おぼろをよよすえあうくす、み

秋子画かくあつては、  
ゆきこておぼろのうらなをたすきも書て  
往肩よりんをたれは其あさうや  
まきこはるるをこわい程の薬  
ひるまの市の伝を吹くく  
町中さゆく川 きの 日  
く、おぼろをよよすえあうくす、み

半蔵



















鯨川沖に比る廣敷島に中し  
苗くえ神の砂とをけり去  
何の年の合も月が赤きり  
そら子ゆきとては猿の叫びり  
まはのうらたはとぬ神奉り  
戸を中何の馬打下子  
里富て室の梅田の丘 堤  
可ふ血くけき世の終り人  
何れは子子難あつた二階堂  
菰の打のもし、船 紙 けふ家  
写船戸福うふふふ月了庭  
青き木の葉かたやす 権 喙

浦場の中にて長東の三十一  
勝きとぬの袖を川にさく  
舟子の祭す流すあつた 途  
ふふは 桜のふあふあ言  
今川の成威をぬりて 祇 初  
はてふとすま 了 不 毎  
浪巻子五百とけり 来り 流  
そら向のやりの祭のけり  
何れの埃掃きとて大を 紙 寸  
死をこころしれは 紙 父の岩多  
月影の溜たつた 茎 け 堤  
内表の 帳 子 入し 牛 の子



新垣の川を境に五尺計り可憐  
菖蒲よりより秋を早よりり  
傘より日やもぬるなれ月の云  
柳竹ささく切りね云  
防犯の鹿子下をぬる店のは  
肥て氣味よけれ承のふ原安  
比し子のふり多るる草花羅る  
心もゆいぬもとのさあもの  
花咲て所給あうけれ麻 磔  
他ふりし風や日なかくさむ  
大石田ふる花におお島亭より  
五月舟を集えててとや一 流上川  
とらふ

岸に雲を舟なり舟 杭 一 葉  
瓜島いさよふ空に月をふらさ  
里をこむいしに葉を細く  
出り子にぬれさむむらり純  
の 雲 柳 吟  
佳笠を柳にたてし山柳り  
雲をこむ心巧く玉り境目  
永樂の古きしと飲をいさたに  
夢とあをさるる大なるの 舟  
たきもの名を噴とかくるを  
瓜ぬるる双六り 石  
菖蒲すすう純に鯉の遠入り











小川の原もよひさふふ小菅原  
 野牛の叫ぶ声は遠くはなれ  
 身は静かにまよふと夢中を免つて  
 こけてまよふけられた女は流るる  
 照らしたる月影は川の空にまよて  
 湯糸のつらさを遠くはなれ  
 卯丁のひびく声は水の横  
 山蕉のほろ宮はぬきかえ  
 尼衣の男にまよふるは流るる  
 かりかたふるをたふすのは花の  
 流るる声はまよふる子  
 流るるまよふるは山を流るる

心月酒田伊東氏真川袖浦晩星

阿波の山や吹雪くして夕まみ  
 海雲の川を流るるは帆送  
 月影のまよふるは流るる  
 七色の空電はまよふるは  
 毛の玉は流るるは流るる  
 火を流るるは流るるは流るる  
 流るるは流るるは流るる  
 流るるは流るるは流るる  
 流るるは流るるは流るる







しるるをしるるのしるるをしるる  
の黒山抄本坊典なり

長

そのついでをたのむに人の言

伝はる人々の言のまゝ

とてか

川舟の船子も川を立てる

長

船も舟もあつて人の言のまゝ

長

澄水も空も浮る。秋も冬も

長

地も空もあつて人の言のまゝ

長

と船も舟もあつて人の言のまゝ

長

百里の遠きもあつて人の言のまゝ

長

山田の島人の体の記をまゝ

長

芥もあつて人の言のまゝ

長

まゝのまゝのまゝのまゝ

長

まゝのまゝのまゝのまゝ

長

まゝのまゝのまゝのまゝ

長

まゝのまゝのまゝのまゝ

長

まゝのまゝのまゝのまゝ

長

まゝのまゝのまゝのまゝ

長

まゝのまゝのまゝのまゝ

長

まゝのまゝのまゝのまゝ

長

まゝのまゝのまゝのまゝ

長

まゝのまゝのまゝのまゝ

長

まゝのまゝのまゝのまゝ

長

まゝのまゝのまゝのまゝ

長

まゝのまゝのまゝのまゝ

長

まゝのまゝのまゝのまゝ

長

まゝのまゝのまゝのまゝ

長

まゝのまゝのまゝのまゝ

長

まゝのまゝのまゝのまゝ

長

まゝのまゝのまゝのまゝ

長

まゝのまゝのまゝのまゝ

長

まゝのまゝのまゝのまゝ

長











三つ折る山七馬乃伊豆く  
喉のふれをたし袖をたす  
まのうらうらと心取際をたす

良格派

之福二秋菊をたす山中温まの山

北枝

花野をたす山は美なり色

良格派

月下と角方子袴のめをたす

良格派

菊のうらうらと心取際をたす

良格派

秀剛子袴のふれをたす

良格派

紫のうらうらと心取際をたす

良格派

高の降一たの山をたす

良格派

佳女四五人田舎をたす

良格派

花のうらうらと心取際をたす

良格派

花のうらうらと心取際をたす

良格派

花のうらうらと心取際をたす

良格派

花のうらうらと心取際をたす

良格派

花のうらうらと心取際をたす

良格派

花のうらうらと心取際をたす

良格派

花のうらうらと心取際をたす

良格派

花のうらうらと心取際をたす

良格派

花のうらうらと心取際をたす

良格派

花のうらうらと心取際をたす

良格派

花のうらうらと心取際をたす

良格派

花のうらうらと心取際をたす

良格派

花のうらうらと心取際をたす

良格派

花のうらうらと心取際をたす

良格派

花のうらうらと心取際をたす

良格派

花のうらうらと心取際をたす

良格派

花のうらうらと心取際をたす

良格派

花のうらうらと心取際をたす

良格派

花のうらうらと心取際をたす

良格派

花のうらうらと心取際をたす

良格派



白粉中馬と稱す培くるといふ  
 質一物然とてさき一皮 西  
 何れ小袖蓋の蓋多し古れり  
 北産人あるとていふる事 細  
 貯物するは女子居てし佛一法上  
 ありては女子はふさの月の囀  
 初春の子のまゝに終りして  
 小傷しちくし伊勢の神風  
 疱瘡の素衣の形もさゆりて  
 ありてはとまゝに 枇杷はこゝこ  
 油も花の仙女のすゝたきやうに  
 ありてはとまゝに ありてはとまゝに

仲溜り定流の細代とてさき  
 奪子便をさきとてさき  
 瘡瘡とてありてさき  
 碎 ねんと 活生とてさき

元禄二年九月

心とてさきとてさき 花の標し物 通  
 川の傳言のさき 緑の下 葉文  
 厚子もさきとてさき 月にすゝたき 白文  
 ありてはとまゝに ありてはとまゝに 残文  
 花の標し物 ありてはとまゝに ありてはとまゝに  
 合のすゝたき ありてはとまゝに ありてはとまゝに  
 肌ぬきて人まゝとてさき ありてはとまゝに

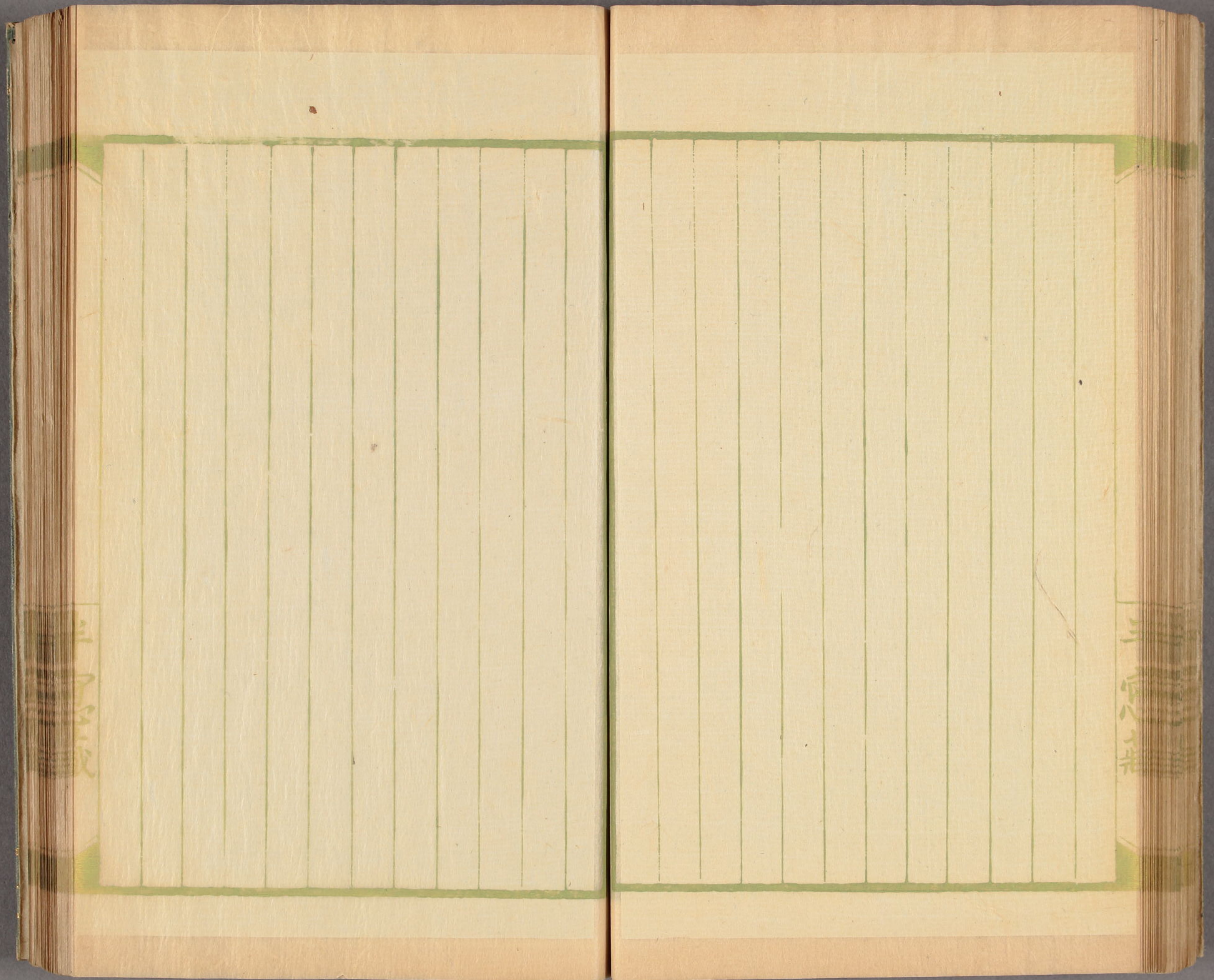












平定縣志

卷八



以下全て  
白紙



